

チベット撰述のアビダルマ文献

井 上 智 之

チベット仏教においてアビダルマ (chos mñon pa) という場合、文献的には極めて範囲の狭いものでおよそ『阿毘達磨俱舍論』(以下、『俱舍論』)と『大乘阿毘達磨集論』(以下、『集論』)の二つに限定されるといっても過言ではない。しかし、アビダルマというものが重要視されていなかったという訳ではなく、事実現在でも因明・般若・中観・律とともに学習の主要課題となっている¹⁾。ところで、それら主要課題の内、既に因明と中観に関しては、チベット仏教々団内でサキャ派とゲルク派を中心とする各宗派間において多くの論争が繰り返されてきたことが研究によって明らかにされている。この各宗派間での論争はアビダルマを理解する際にも行われていた様である。

そこで本稿では、チベット仏教々団におけるアビダルマ理解に関する宗派間での論争の内容を明確にするための手掛りとして、チベット撰述のアビダルマ文献にどのようなものがあるのかを紹介してみたい。もちろん、現在に至る迄の文献全てを紹介することは余りにも膨大すぎて不可能であるから、何らかの限定を加える必要がある。チベット撰述のアビダルマ文献を知る上で便利なものにロンドルラマ Kloñ rdol bla ma (1719-1794) が書いた *Nañ rig pa mñon pa'i sde snod kyi don bsdu ba'i min gi grangs*がある³⁾。この中に紹介されている文献については既に池田練太郎氏がリストを挙げておられるが、それらの文献は殆どゲルク派のものでありサキャ派のものについては全く触れられていない⁴⁾。そのことを考慮して本稿では、サキャ派後期のパンディタであるガワンチュータク Ñag dbañ chos grags (1572-1641)の著作である *Pod Chen Drug*

gi gTam (以下, PCDT.) に紹介されているアビダルマ文献を中心に紹介してみたい。⁵⁾

まず、本論に入る前に PCDT. の作者であるガワンチュータクという人物と PCDT. 全体の構成について触れておこう。

ケツンサンポ氏によると、彼は、チェンガクンチョクギヤムツォ *sPyan sñā dKon mchog rgya mtsho* のもとで出家している。ガワンチュータクという名前も彼から授与されたものである。彼に就いて学んだ後、ルトップギヤムツォ *Klu grub rgya mtsho* のもとで道果説 (*lam 'bras*) に関する教科書 (*yig cha*) 等を多く説示した。またケンチェンワンチュクペルサン *mKhen chen dBaṅ phyug dpal bzañ* にも師事している。⁶⁾

彼の書いた『俱舍論』の註釈, *Dam pa'i chos mñon pa mdzod kyi spyi don ji sñed śes bya'i gsal byed* の奥書にはワンチュクペルサンの名前と同時にジャムヤンシェラプギヤムツォ *'Jam dbyañ śes rab rgya mtsho* の名を見出すことが出来る。⁷⁾

この註釈書は、自分の見解と異なる人物の名を挙げ、相手側の見解を引用した上で批判しているのでチベットにおけるアビダルマ理解を研究する上で、極めて有意義なものと言えよう。また、コラムバ *Go rams pa bSod nams señ ge* (1429-1489), ムーラブジャムパ *rGyal ba Mus rab 'byams pa*, シェラプウセル *Śes rab 'od gsal*, ルトゥップギヤムツォ等の彼が依拠している多くの先学達の言葉も引用されており、非常に興味深いものである。

本論文の中心資料である PCDT. は仏教の教義を般若 (*phar phyin*), 因明 (*tshad ma*), 律 (*'dul ba*), アビダルマ (*chos mñon pa*), 中観 (*dbu ma*) 三律儀 (*sdom gsum*) の六つに分けて説明したもので、その内の第四番目がアビダルマの章になっている。第四章は、初めにインドにおけるアビダルマ文献を紹介した後、本稿の中心部分であるチベットのアビダルマ文献を挙げる。そして、後半部分ではチベット内におけるアビダルマ教義理解についての論争が記述されている。この PCDT. は、サキャ派においてどのような註釈書が作られ

たのか、またどの様に仏教を理解していたのかを知るために非常に便利なものである。

さて、PCDT. においてチベットでのアビダルマの伝承はタルマニンポ Dar ma sñin po から始まっており、彼は『集論』を聴聞し広めたと説かれている。⁸⁾『テプテルゴンボ』によるとタルマニンポはラティサンバル Rwa khri bzañ 'bar からアビダルマの教義を学んでおり、⁹⁾さらにラティサンバルはウェーギェルワゲシェ dBas rgyal ba ge śes から『集論』を学んだ、とされている。¹⁰⁾『テプテルゴンボ』にはウェーギェルワゲシェに至る迄の『集論』伝承の系譜が列挙されているから、¹¹⁾これらを繋ぐと

Asaṅga—Vasbandhu—Stiramati—Pūrnavardhana—Jinamitra
—dPal brtsheg—Klu'i rgyal mtshan—Ye śes sde—Lha luñ
dpal gyi rdo rje—Nam nañ zla ba'i rdo rje—dBus rgyal ba ge
śes—Rwa khri bzañ 'bar—Dar ma sñin po

という系譜が考えられる。この系譜は殆どの後期アビダルマ文献撰述者の相承系譜の中にも見出すことが出来、後期チベット仏教においては一般に認められていた伝統的系譜と言えよう。

『ブトゥン仏教史』によると、「『集論』の伝承は低地を通じて行われてきた」と説かれている。¹²⁾先の系譜の中にラルンベルキドルジェの名が含まれているが、彼はランタルマを暗殺してアムドへ逃亡した人物であるから、¹³⁾タルマニンポが受け継いだ『集論』伝承の系譜中に彼の名前を見出せることは非常に興味深い。つまり、『集論』の伝承がランタルマの破仏以前から綿々と低地を通じて続いてきたことを強調する為の作為的な系譜であるという可能性があり、今後この伝承系譜の内容を吟味する必要がある。

PCDT. において文献名が初めて登場するのはタクパギェンツェン Gṛags pa rgyal mtshan (1147-1216) の書いた *rGyud kyi mñon par rtog pa rin po che'i ljon źin* ¹⁴⁾である。これは宗義書であるが、その中には『俱舍論』と『集

論』の教義に対する解釈が多く含まれていると PCDT. は伝えている。

アビダルマ文献としてはパクパロトゥーギェンツェン 'Phags pa Blo gros rgyal mtshan (1235-1280) の *mDzod kyi spyi don śes bya rab gsal* が最初¹⁵⁾に登場する。彼はサパンの甥 (dbon) にあたり元の帝師として有名であるが、チベット大蔵経の変遷を知る上でも重要な手掛りを与えてくれる。彼が編纂に加わっている『至元法宝勘同目録』には、漢訳大蔵經典に対応するチベット訳の有無が記載されているのである。それによると『集論』にはチベット訳が存在しなかったことになっている。¹⁶⁾しかし彼は『彰所知論』を書いており、その中に現存する『集論』の内容を多く引用している。¹⁷⁾彼が漢訳『集論』を読んで『彰所知論』に引用したとは考え難いので、先に挙げた『至元法宝勘同目録』の情報には疑問がもたれる。現在、彼が書いた『俱舍論』或いは『集論』の註釈書は見出すことが出来ず、真に残念である。

次にパンロツァーフロトゥーテンパ Blo gros brtan pa (1276-1342)¹⁸⁾の『集論』に対する註釈 *Kun btus la rnam bsad śes bya gsal byed* の名を見出せる。¹⁹⁾ロトゥーテンパはチョナン派の人で、『テプテルゴンポ』の記録によると彼に至る迄の『集論』相承系譜は

—Ko bo Ye śes 'byuñ gnas—Rog Chos kyi brtson 'grus—Bye skyid pa (etc.) —Chos sku 'od zer—mChims brTson señ—Dar ma mgon—mChims brTson rgyal—Śon blo brtan—Lo tsa ba mChog ldan—Blo gros brtan pa

となっており、²⁰⁾さらに彼はチャンチュプツェモ Byañ chub rtse mo に伝えている。この系譜のチムツウンセンからチャンチュプツェモ迄の師資相承はシャーキャチョクデンの『集論』聴聞の系譜と同一である。²¹⁾またロトゥーテンパ、チャンチュプツェモの名前はゲデン派のギェルツァブ・タルマリンチェン rGyal mtshabs Dar ma rin chen (1346-1432) の『集論』聴聞の系譜にも²²⁾列挙されているのである。

ところで、『テプテルゴンポ』には上記のコウォ・イエシエジュンネからロ

トウーテンパを経てロトウーギャムツォ Blo gros rGya mtsho に至る系譜と、同じくコウォ・イエーシェージュンネから始まりプトウンリンチェントップにいたる上記の系譜とは異なった第二の『集論』聴聞系譜を記録しているのである²³⁾。この記述はチベットにおける『集論』の伝承状況や各宗派間での論争を研究する上で重要なものと言えよう。

PCDT. では次にチムツォンセン、チムナムカータク mChims Nam mkha' grags (1210-1289?), チムロサンタクパ mChims Blo bzañ grags pa (1299-1375) の三人を挙げている。チムツォンセンは先の『テプテルゴンポ』の系譜によればチュークウーセル Chos sku 'od zer から『集論』の聴聞を受けたことになっているが、シャーキャチュクデンの聴聞系譜にはタルマニンボから聴聞したとある。²⁴⁾ さらに大谷大学講師のツルティムケサン氏はアティーシャの弟子であるパニーターミティがカム地方で説いた伝統を受け継いだと述べている。²⁵⁾ この聴聞系譜に関しては今後さらに調査する必要がある。²⁶⁾

また、アクリンポチェ A khu rin po che (1803-1875)の『稀観書目録』を見るとチムツォンセンの *Nag 'byams su grags pa'i tik* がチベットにおけるアビダルマの註釈書の最初であると述べられており非常に興味深い。²⁷⁾

チムナムカータクの書いた『俱舍論』註は、『チムズー』 *mChims mdzod* と呼ばれ親しまれている。彼は、カダム派系の人でナルタン寺の第七代目の座主であるが、²⁸⁾ 彼の書いた註釈は宗派を超えて用いられており、恐らくチベット撰述のアビダルマ文献の中で最も重要視されていると言って良いだろう。ダライラマ一世の『俱舍論』註も『チムズー』を参照しつつ講説したものと言われている。²⁹⁾ 『チムズー』の奥書を見ると、チムナムカタクはチム一切智者 mChims Thams cad mkhyen pa から『俱舍論』を聞いたとされる。³⁰⁾ このチム一切智者が、誰を指すのか明らかではないが、プトウンリンチェントップの『俱舍論』聴聞の系譜を見ると

Smṛtijñānakīrti—Gyas chen po śes rab grags—Ra Ṭags zla ba
——mChims ʒaṅ brtsun——mChims Lha rje go che——mChims

brTson señ—mChims Don grub rgyal ba—mChims brTson
rgyal—mChims Blo gros brtan pa—mChims Nam mkha' grags
—Tshad ma'i skyes bu—Bu ston rin chen 'grub

となっており、³¹⁾ チムナムカータクはチムロトゥーテンパから『俱舍論』を聴聞したことになるので、彼がチム一切智者と呼ばれる人物であるのかも知れない。チム一切智者が誰を指しているのかということは、今後の重要課題といえよう。³²⁾ このプトゥンの『俱舍論』聴聞系譜は、チム家の系譜を考える上で重要な資料である。また、上記の系譜の冒頭に出てくるスムリティ・ジュニャーナキールティはインド人でアティーシャの弟子であるが、³³⁾ 彼はアティーシャの弟子になる以前にカム地方にアビダルマ教学のための学校を作ったとされ、³⁴⁾ 彼の伝えたアビダルマ教学がチム家所伝の『俱舍論』解釈と何らかの関連があったのかもしれない。このことも、チム流 (mchims lugs) の『俱舍論』解釈を考える重要な手掛りになるだろう。

チムロサンタクパの著作として *Chos mñon pa gsal byed legs par bsad pa'i rgya mtsho* が現存している。これは、チムナムカータクの書いた『チムズー』に対して『ズーチュン』 *mdzod chuñ* と呼ばれており、ナムカータクのものと同様、重要視されている。

ツォンカパの師匠として知られるレンダーワ・シュンヌロトゥー Red mda' ba g'Zon nu blo 'gros の名前も³⁵⁾ 見出せる。レンダーワはカムリンにおいて『集論』の註釈書を著述したとされる。³⁶⁾ ギェルツァブ・タルマリンチュンの『集論』聴聞系譜を見るとレンダーワは、チャンチュプツェーモより『集論』を受け継いでいるから³⁷⁾ 彼も又、パンローツァーワやシャーキャチョクデンと同じくチムツォンセンを含む第一の『集論』相承系譜の中に位置づけられるのである。

次にポトンパンチュン・チョクレーナムギェル Bo don pañ chen Phyogs las rnam rgyal の名前を見出すことが出来る。PCDT. には『俱舍論』の註釈書だけが紹介されているが、実際には『集論』に対する註釈も³⁸⁾ 現存している。彼の伝えるそれらの内容は現在我々が見得る『集論』のテキストと異なっている

部分が多い。そこで、それぞれから一つずつ例を挙げてみよう。『集論』では五蘊の順序について

ci'i phyir phuñ po rnam go rims su blags še na/rnam par śes pa'i gnas ñid kyī phyir te/rnam par śes pa'i gnas bži dañ rnam par śes pa'o //yañ sña ma ni phyi ma'i rten yin pa'i phyir te/ (中略) yañ kun nas ñon moñs pa dañ/rnam par byañ ba ñid gyi phyir te/ (以下略)

どうして諸蘊を(先の様な)順序として認めるのかというと、識住(の順序に従っている)からであって、四識住と識である。或いは、前のものが後のものの拠所であるからであって、(中略)或いは雑染と清浄であること(という順序に従っている)からである。

と説明を加えているが、³⁹⁾ポトンパンチェンの註釈には

rims ni rags dañ kun ñon moñs// snod sogs dañ khamś ji bžin no//
(五蘊の)順序は粗雑と雑染、器等のものと界(の順序)である。

となっているのである。⁴⁰⁾この相異は、『集論』と『俱舍論』の混同によって生じたものと思われるが、⁴¹⁾ポツンリンチェントップ Bu ston Rin chen 'grub (1290-1364) も『集論』に対する註釈において同じ内容を伝えており非常に興味深い。

また、『俱舍論』では四識住について

bži gañ že na rnam par śes pa gnas pa gzugs su ñe bar 'gro ba dañ/tshor bar ñe bar 'gro ba dañ/'du śes su ñe bar 'gro ba dañ/'du byed du ñe bar 'gro ba'o//

四つとは何かというと、識の住処が色に属するものと、受に属するものと、想に属するものと、行に属するものと(の四つ)だ。

と説明しているのに対して⁴²⁾ポトンパンチェンは、

de bži ni rnam śes la gnas pa yin la/rnam śes ni de dag gi gnas so/des na rañ 'grel de dag las rnam śes gnas so/zes pa ni ma dag

go//

以上の四つが識に住しているのであって識は、それら（四つ）の住処であるのだ。だから、『俱舍論』の自註などに「識が住しているのだ。」と言っているのは正しくないのである。

と述べており、⁴³⁾『俱舍論』自註の訳を批判している様であるが、自註の中に
ci'i phyir rnam par śes pa la rnam par śes pa gnas pa śes mi bya
že na/bye brag tu smra ba rnams na re gnas pa po yoñs su sbañs
nas ba źes bya'i phyir te/ gnas pa po yoñs su sbañs nas gnas pa źes
bya ba'i phyir te/ gnas pa po ñid la ni gnas pa źes mi bya ste /dper
na rgyal po ñid rgyal po'i stan ma yin pa bźin no//

どうして識に対する識の住所という様にはならないのかということ、毘婆娑師（の意見）によれば、住む人を除くから住処というのであって、住む人としての住処という様にはならない。たとえば、王様が王座ではない様にてである。⁴⁴⁾と説かれているから、やはり識が住するものであり、色・受・想・行の四つが住処なのである。先のポトンパンチェンの説明は、唯識思想に基盤を置いている様にも思われる。少なくとも、『俱舍論』本来の内容を無視した特異なものであることは間違いない。

『テプテルゴンポ』によるとポトンパンチェンの住していたポトンイエー Bo doñ ye というところは、『集論』の相承を考える上で重要な地域であり、アビダルマや律等の多くの典籍が存在していたと述べられている。⁴⁵⁾また、プトゥンもここで学んだとも伝えており非常に興味深い。彼の伝える内容が、現在の我々が見得るテキストと異なっているのはアビダルマ文献に関してだけではないようで、今後彼の著した諸文献に対する研究がポトンイエーという地域の⁴⁶⁾問題を含めてなされるべきである。

次にロントゥンチェンポ Roñ ston sMra ba'i señ ge(1367-1449)の *rNam bśad śes bya'i mdzod* ⁴⁷⁾が紹介されている。彼はヤクトクサンギェペル gYag phrug Sañs rgyas dpal (1350-1414) の弟子でナーレンドラ僧院 Na lendra

の創建者として知られている。⁴⁸⁾ シャーキャチョクデンの『集論』聴聞系譜を見ると、彼はロツァーワタクパギェンツェン Lo tsa ba Grags pa rgyal mtshan から『集論』を聴聞している。⁴⁹⁾

次にシャーキャチョクデン Śākya mchog ldan (1428-1507) の著作が紹介される。⁵⁰⁾ PCDT. には *mNon pa kun btus la bśad tshul rgya mtsho'i rlabs kyi phren ba* ⁵¹⁾ という『集論』の註釈と *mDzod la spyi don chen mo bye brag bśad mtshor grags pa* ⁵²⁾ という『俱舍論』に対する註釈の二つが列挙されている。彼はサキャ派を代表する人物の一人であるが、後半、唯識学に傾倒し如来藏思想と唯識教学を併合して他空説を説いたためサキャ派内部では異端者扱いを受けていた様である。⁵³⁾ 彼は屢々サキャ派でありながら同じサキャ派の人物に対して攻撃的な姿勢を取ることがあり、その論争内容はサキャ派の教学を考える上で非常に興味深い。

シャーキャチョクデンも又ポトンパンチェンと同様、他の註釈家達とは異なった説明をしていることが多い。PCDT. ではポトンパンチェンとシャーキャチョクデンの二人のことを、

mkhas pa de gñis ni mkhyen rab nam mkha' ltar yañs drags pa yin
nam/gZuñ lugs kun tu grub mtha' zur 'dod byiñs dañ mi mthun pa'i
ha cañ thal che ba re mdzad pa phyag srol la 'dug//

「この二人の賢人達は、賢明なること虚空のごとく広大であるばかりでなく、(サパンが書いたと言われる) *gZuñ lugs kun tu grub mtha'* の概要を全面的に認め(ながらも一方それとは) 反対の殆ど灰と化してしまった伝統的な解釈を残しているのである。」

と述べており、非常に興味深い。⁵⁴⁾ シャーキャチョクデンとポトンパンチェンの関連についてはシャーキャチョクデンの『集論』聴聞の系譜からも明らかである。つまり、かれの『集論』聴聞系譜を見ると、

—Dar ma sñiñ po—mChims brtson señ—Dar ma mgon—
mChims brtson rgyal—Śoñ Blo brtan—Lo tsa ba mchog ldan—

dPañ lo tsa ba—Byañ chub rtse mo—Lo tsa ba Grags pa rgyal
mtshan—Roñ ston chen po—Bo don pan chen—Blo gros rgya
mtsho—mKhas grub A mo gha śrī—Śākya mchog ldan

となっており、彼の『集論』相承系譜の中にボトンパンチェンの名前を見出すことが出来るのである。⁵⁵⁾

また、上記の系譜中に挙げられているパンロツァーワとチャンチュブツェモの名前は、ゲデン派のギェルツァプ・タルマリンチェンの『集論』聴聞系譜の中にも見出せる。⁵⁶⁾ このことは、ゲルク派とサキャ派の論争を考える際、常に念頭に置いておく必要がある。

PCDT. ではさらに、彼の『俱舍論』に対する註釈が作られてから後、チベットにおいてアビダルマ理解についての論争がなされる様になったとも伝えている。⁵⁷⁾ 彼が伝える『集論』の内容と、他者（サキャ派の者を含む）との論争点については稿を改めて紹介する予定である。

シャーキャチョクデンに続いて、同じくサキャ派において最も重要な人物であるコラムパ・ソナムセンゲ Go rams pa bSod nams señ ge (1429-1489) の名前が挙げられている。⁵⁸⁾ 彼の書いた *Phuñ khams skye mched kyi rnam g'zag ston pa ji sñed źes bya'i sgo 'byed* は『俱舍論』の第一章、第二章を底本としつつ、『集論』の内容と照らし合わせてあるので興味深い。アクリンポチェの稀觀書目録には、彼の著作として *mDzod no mtshar gsum ldan jes sñes* を挙げている。⁶⁰⁾ シャーキャチョクデンと彼との論争を研究する上でコラムパのアビダルマに関する師資相承を知ることが必要であるが、残念ながら現段階では見つけ出せなかった。

次にギェルワ・ムーラプジャムパ rGyal ba Mus rab 'byams pa の *mDzod la tik yon's su rdzogs pa* の名が挙げられている。⁶¹⁾ PCDT. によれば、彼はコラムパの弟子である。

PCDT. では次にシェーラブウーセル Śes rab 'od gsal の名前が見出せるが、彼の伝記、著作等は見出し得なかった。⁶²⁾

次にルドゥプギャムツォ Klu sgrub rGya mtsho の名が挙げられる。ルドゥプギャムツォは、ロサルギャムツォ Blo gsal rgya mtsho の弟子である。⁶³⁾ また、彼はガワンチュータクの師匠である。PCDT. には、彼のアビダルマに関する著作として *mDzod kyi spyi don chen mo, gZuñ gi dka' ba'i gnas rnams la dog kyi phren ba bkod pa, dBañ po'i rnam g'zag, rGyu 'bras khyen gsums gsal zul bkor gyi rim pa no mtsar ba du ma* の四つを挙げ⁶⁴⁾ ている。

つぎにパンチェンシユンギャバ Pañ chen gZuñ brgya pa dños grub dpal 'bal の名前を見出せる。パンチェンシユンギャバはジャムヤンクンガーチューサンの弟子でチューコルルンポ chos 'khor lhun po を建てた人物である。⁶⁵⁾ PCDT. では、彼が書いた『俱舎論』註の帰敬偈には密教で説くところの和合七支 (kha sbyor yan lag bdun) が説かれている、と述べられている。⁶⁶⁾ これは、如来の報身の自性には七つの支分がある、というもので、『俱舎論』の中には説かれていない教義である。チベットにおけるアビダルマ理解を考える上で興味深いものと言えよう。

PCDT. では次にジャムヤンチューウセルの名前が挙げられているが、彼の伝記、著作等は見出し得なかった。⁶⁷⁾

以上、PCDT. に記述されているアビダルマ文献と、その作者について紹介をしてきた。その内、コラムパソナムセンゲ以降のサキャ派の文献や人物に関しては情報が急に少なくなる。もちろん、筆者の不徳の致すところであることは言うまでもないが、サキャ派の教団史にも若干の問題がある様に思われる。つまり、サキャ派の中心寺院であるナーレンドラ寺院が破壊されたために、サキャ派が伝える多くの書物や伝承が失われてしまったからである。⁶⁸⁾ このことに關しても今後の詳しい研究が待たれるところである。

本論で紹介した内容の中で特に注目すべきことは、チムナムカータクを中心とするチム流 (mchims lugs) の俱舎学とボトンパンチェンの伝えるアビダルマに関する古い伝承の相違点、そしてシャーキャチョクデンとコラムパ・ソナ

ムセング等の論争であろう。また中觀至上主義を取る一部のチベット仏教において、アビダルマ教学がどのような形で伝えられているのかということも重要な問題である。これらの問題について先に述べたガワンチュータクの『俱舍論』に対する註釈は様々な情報を与えてくれる。いづれ諸資料を再吟味した上で、稿を改めて詳説したいと考える次第である。

注 記

- 1) Lodrö G.- *Geschichte der Kloster-Universität Drepung* ('bras spuñs chos 'byuñ) 1. Teil: Tibetischer Text, Wiesbaden 1974.
- 2) 因明に関しては、小野田俊蔵「チャパ=チュウキセングによるプラサンガの分類」『チベットの仏教と社会』山口瑞鳳監修, pp. 341-364。中觀派における論争については松本史朗「Tsoñ kha pa 独自の中觀思想について」『日本西藏學會々報』第27号, pp. 341-364 等参照。
- 3) *Śata-piṭaka* Vol. 100, New Delhi 1975, pp. 585-659. (東北 No. 6544).
- 4) 池田練太郎「チベットにおけるアビダルマ仏教の特色」『東洋學術研究』第21巻・第2号, 1982年, pp. 128-142。
- 5) *Bod kyi mkhas pa śna phyi dag gi grub mtha'i śan byep' mtha' dpyod dan bcas pa'i 'bel ba'i gtam skyes dpyod ldan mkhas pa'i lus rgyan rin chen mdzes pa'i phra tshom bkod pa*, Thimphu, Bhutan 1979.
- 6) Ketsun Sangpo: *Biographical Dictionary of Tibet & Tibetan Buddhism*, Vol. XI, Dharamsala 1974.
- 7) *dam pa'i chos mñon pa mdzod kyi spyi don ji sñed śes bya'i gsal byed*, New Delhi 1978.
- 8) PCDT. Fol. No. 159.
- 9) 『青史』四川民族出版社, 1984, p. 419.
- 10) 『青史』四川民族出版社, 1984, p. 419.
- 11) 『青史』四川民族出版社, 1984, p. 419.
- 12) 羽田野伯猷「チベットの仏教受容と変容の原理の一側面」『東北大学日本文化研究所研究報告』p. 71。
- 13) A. Stein: *Tibetan Civilization*, Stanford, 1972, p. 69.
- 14) PCDT. Fol. No. 159.
- 15) PCDT. Fol. No. 160.
- 16) 『昭和法寶總目錄』第二卷 p. 228c.
- 17) 大正No. 1645, また, Constance Hoog; *Prince jin gim's Text Book of Tibetan*

Buddhism 参照のこと。

- 18) Leonard W. J. Vanderkuijp: *Alt-und Neu-Indische Studien*, Band. 26, ss. 297-298. 参照。
- 19) PCDT. Fol. No. 160.
- 20) 『青史』四川民族出版社, 1984, pp. 419-420.
- 21) *Complate works of gser mdog paṇ chen śākya-mchog ldan*, Vol. 14, fol. 339,
- 22) *legs paṇ bśad pa chos mñon rgya mtsho'i sn̄n po bzigs pa'i dbu'i phyogs lags*, 大谷蔵外 No. 10149, Fol. 214b.
- 23) 『青史』四川民族出版社, 1984, pp. 419-420, 尚, G. N. Roerich は翻訳の際にこの二つの系譜を一つのもつと間違えて繋いでしまっている。BA. p. 345参照。
- 24) PCDT. Fol. No. 160.
- 25) *Complate works of gser mdog paṇ chen śākya-mchog ldan*, Vol. 14, fol. 339.
- 26) Tshul khrim sKar bzañ: *Chos mñon mzdod dan 'brel ba'i spyi bśad, 'grel pa'i rgyan*, NewDelhi 1982, p. 86.
- 27) Lokesh Chandra: *Materials for A Tibetan Literature, Śata-pitata series*, Vol. 28, NewDelhi 1963, p. 534.
- 28) *dPal snar than chos sde'i lo rgyus*, 西藏人民出版社刊, 1983, pp. 39-40.
- 29) *mDzod tik thar lam gsal byed*, Sarnath, 1973.
- 30) *chos mñon mdzod kyi tshig le'ur byas pa'i 'grel pa mñon pa'i rgyan*, Buksa 1967.
- 31) 羽田野伯猷前掲書 p. 138.
- 32) チムズーの作者をツルティム・ケサン氏は前掲論文の中でチムジャムペーヤン mChims 'jam pa'i dbyans とし、チムナムカタクとは別人として誤解しておられたが、アクリンポチュの稀観書目録 p. 544 を見ると チョムデンリクレル bCom Ldan rigs ral の弟子としてチムジャムペーヤンの名前を見出せる。チムナムカタクがチョムデンリクラーの弟子であることは周知の事実であるから、ナムカタクとジャムペーヤンが同一人物であることは間違いない。氏も近年チムジャムペーヤンとチムナムカタクが同一人物であることに気付かれたらしく、大谷蔵外目録索引ではチムジャムペーヤンの項を見ると see mchims nam mkha' grags となっている。氏が誤解された原因は、恐らくチム一切智者をチムナムカタクだと判断されたことに依ると思われる。ロンドルラマの前掲書を見ると、mChims Thams cad mkhen pa'i Slob ma mChims 'Jam dbyaṅs (チム一切智者の弟子であるチムジャムペーヤン) と説かれており、この一切智者をチムナムカタクと誤解されたのだ

ろう。池田練太郎氏も、このロンドラマの内容を見てチムナムカタクとチムジャムペーヤンを師弟として考えている。池田練太郎氏の誤認は羽田野伯猷氏の論文を参考にされたからである。羽田野伯猷氏はナムカタクのことを、チム一切智者ナムカタクとしているので、池田氏は、このことに惑わされてしまったのだろう。羽田野氏の論文には、原語も典拠も明らかにされていないので真偽は定かではないが、『ブトゥン仏教史』等を調べて明らかにする必要がある。少なくとも、チムズーの奥書を見る限り一切智者はナムカタクとは別人であるとしか考えられない。

33) スムリティについては、川越英真「Smṛtijñānakīrti をめぐる Khams の仏教活動について」『印仏研』第35巻第1号, pp. 323-318に詳しい。

34) A. Stein 前掲書 pp. 72-73。

35) PCDT. Fol. No. 160.

36) *Tshul khrim sKar bzañ: Chos mnoñ mdzod dañ 'brel ba'i spyi bsad 'grel pa'i rgyan gyi rgyan*, NewDelhi 1982, p. 86.

37) *legs par bsad pa chos mñon rgya mtsho'i sñiñ po bzigs pa'i dbu'i phyogs lags* 大谷蔵外 No. 10149, Fol. 214b.

38) ENCYCLO-PEDIA TIBETICA, Vol. 16.

39) 東北 No.4049, ri, 55b 1, 1-4.

40) ENCYCLO-PEDIA TIBETICA, Vol. 16, Fol. No. 20, 1.6.

41) *The Collected works of bu-ston, Śata-Piṭaka series*, Vol. No. 60, India 1971, Fol. No. 145.

42) 東北 No. 4090, kull4a6.

43) ENCYCLO-PEDIA TIBETICA, Vol. 19, Fol. No. 24.

44) 東北 No.4090, kull4b, 1-2.

45) 『青史』p.420.

46) 斎藤舜健「ENCYCLOPEDIA TIBETICA 所収“大宝積經解題”について」『仏教論叢』32号参照。氏の論文を見る限り、ポトンパンチエンは唯識・如来蔵經典に対する説明に最も力を入れている様である。シャークヤチョクデンが唯識・如来蔵思想に傾倒していく際にポトンパンチエンの影響があったとも考えられる。今後、ポトンパンチエンの思想を研究することによって明らかにしたい。

47) PCDT. Fol. No. 160-No. 161.

48) D. Jackson: *The Early Abbots of 'Phan-po Nā-lendra*, pp. 60—61 本論文は未発表のものであるがジャクソン氏と小野田俊蔵氏の御好意により拝読の機を得た。ここに両氏に対して深く感謝の意を表する次第である。

49) *Complate works of gser mdog pañ chen śākya-mchog ldan*, Vol. 14, fol.

339.

50) PCDT. Fol. No. 161

51) *Complate works of gser mdog paṇ chen śākya-mchog ldan*, Vol. 14.

52) *Complate works of gser mdog paṇ chen śākya-mchog ldan*, Vol. 20.

山口瑞鳳「〔第Ⅱ部〕チベット」『仏教史Ⅱ』山川出版社1983年, p.245.

54) PCDT. Fol. No. 163, *gžun lugs kun tu grub mtha'* は従来サパンの著作とされてきたが、近年氏によってサパンの著作ではなく、後代の人が2つの著作を接合して作った偽作であることが明らかにされている。このことについても先のガロンチュータクの記述は注目すべきものであろう。

D. Jackson: *Two grub mtha' treatises of Sa-skya Pandita—one lost and one forged*, The Tibet Journal, Vol. 10 No. 1.

55) *Complate works of gser mdog paṇ chen śākya-mchog ldan*, Vol. 14, fol. 339.

56) *Legs par bsad pa chos mnon rgya mtsho'i sñin po bzigs pa'i dbu'i phyogs lags* 大谷蔵外No. 10149, Fol. b14b.

57) PCDT. Fol. No. 161.

58) PCDT. Fol. No. 161.

59) 『サキヤ派全書集成』Vol.12.

60) Lokesh Chandra: *Materials for A Tibetan Literature, Śata-pitaka series*, Vol. 28, NewDelhi 1963, p. 535.

61) PCDT. Fol. No. 161.

62) PCDT. Fol. No. 161.

63) Ketsun Sangpo: *Biographical Dictionary of Tibet & Tibetan Buddhism*, Vol. XI, Dharamsala 1974.

64) PCDT. Fol. No. 161-No. 162.

65) 立川武蔵訳『トウカン一切宗義—サキヤ派の章一』p.66, 東洋文庫 1974.

66) PCDT. Fol. No. 162.

67) PCDT. Fol. No. 162.

68) D. Jackson 前掲書。

(大学院博士後期課程・仏教学専攻)

